

第47回

住まいとサービスの関係性

近畿大学 建築学部
准教授 山口 健太郎



【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

アメリカの心理学者である Lawton M.P. は、1970年代に高齢者向け住宅と施設の違いを次のように述べている。

・住まいにスタッフを常駐させる場合（高齢者施設の場合）

「建物に介護スタッフを常駐させると十分なケアが提供できるが、サービスが近くにあることは依存を促進し、努力する意志を削いで能力を低下させてしまう。」 Lawton M.P. (1976) p.240 注1)

・住まいとケアが分離している場合（高齢者向け住宅の場合）

「介護スタッフが常駐していない場合、住人は少しくらいの不便を我慢しなければならない。その事が、自立につながり、少しの困難を我慢することが気持ちを鼓舞させる」 Lawton M.P. (1985) p.263 注1)

Lawton の指摘で重要なポイントは、住まいとケアの付帯方法から施設と住宅の違いを明らかにした事であり、その事が高齢者の自立に影響を与えるとしている。Lawton の理論を踏まえると住まいにケアが付帯したのが施設、住まいとケアが分離してたのが住宅となる。施設では24時間365日のケアを受けることができるが、過度なケアや管理された生活が高齢者の自立を損ねてしまう。一方、住まいとケアが分離している場合には、多少の不便はあるが自立が促進される。高齢者の自立の促進やQOLの向上を考えれば、住まいとケアは分離すべきであり、高齢期における住まいとしては「住宅」を目指すべきとなる。

この考え方を日本のサービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）に当てはめてみると、残念ながら多くのサ高住は「施設」になっている。デイサービス

や訪問介護が併設され、併設事業所以外のサービスを利用できない事業所も多い。サ高住は、介護サービスを付帯しておらず外部サービスの利用が前提となるが、実質的にはサービスが建物内で完結してしまっている。

では、なぜサ高住はサービスを付帯するのか。それは、サービスを付けた方が利用者を獲得しやすく、儲かるからである。入居者の家族は、自分たちの手間が省けるより多くのサービスが付帯した事業所を選び、事業者は家賃を下げても介護事業報酬で利益を確保しようとする。また、一般的にサービスメニューが多い方が、サービスの質が高いという印象がもたれている。国土交通省は平成28年度中に各サ高住におけるサービスの付帯状況が分かるサイトを開設すると発表した（2016.9.26 毎日新聞）。各事業所のサービスを一覧化し比較できるというものだが、サービスの有無が「○、×」で表示されれば○が多い方が良いと事業所だと認識されてしまう。理想的には住まいとケアは分離すべきであるが、住まいとケアのパッケージ化は多方面から着実に進んでいる。

だが、この流れの中には利用者（高齢者）の意思という大事な要素が抜け落ちている。サ高住に限らず高齢者施設への入居は家族の意思による部分が大きく、高齢者の意思が反映されていないことが多い。利用者の意見については、詳細な研究が必要であるが、私が調査を行ったある外部サービス型のサ高住では、介護が付いていないことを肯定的にとらえる利用者が多かった。

そこでは、サ高住に入っても今まで通りの生活を行うことができ、気に入ったデイサービスにも通うことができる。少しでも生活費を減らすために、朝食と昼食は自炊し、ケアマネージャーが勧めてもデイサービスは週に2日と決めている。限られた年金の中で生活をやりくりしている、などのコメントを力強く語ってくれた。多くが要支援、要介護の高齢者であったが彼・彼女らには施設入居者には見られない生活に対する主体性があった。また、家族と一緒にヒアリングしたある入居者は、夜中に住戸内で転倒してしまい、「もうここでは無理だね。もっと安心な施設に行かない」という娘のコメントで急に黙り込んでしまった。その真意はわからないが、それまでの話を聞いていた私には、「本当はこのまま過ごしたいが、娘の思いも無下にできない。」という苦渋の思いが伝わってきた。

このように利用者の思いや自立支援という介護の基本原則を踏まえると、住まいとケアが分離した「住宅」としてのサ高住の普及が求められている。家族も事業者も利用者の事を思っている行動が、「いらぬお節介」になってしまう危険性を認識しておかなければならない。ただ、そのためには高齢期における自立についての国民的議論がもっと必要であろう。

注1) 松岡洋子著、エイジング・イン・プレイス（新評論）より引用